

サイクルスポーツ・ツーリズムセミナー
プロサイクルロードレースチーム
『宇都宮ブリッツェン』と地域
～自転車振興を通じた雇用創出と地域づくり～

報告書



平成 30 年 1 月

青森 COC+推進機構
雇用創出連携プロジェクト「ツーリズム」

目 次

はじめに	1
1.セミナーの概要	5
2.参加者アンケート集計結果	35
講演資料、他	

はじめに

青森 COC+推進機構では雇用創出連携プロジェクトとして、ツーリズム関連産業に主眼を置いた取り組みを進めてきています。観光関連産業を青森県の基幹産業にまで成長させていくことを通じて、青森県内に新たな雇用機会を創出していくことを目指しております。これまで、ドイツ式健康ウォーキングやサイクル・ツーリズムを切り口として、従来型の観光振興とは異なるニューツーリズムの形成を推進しています。この活動の一環として先進地事例調査や関連セミナーの開催、実践活動の担い手となるガイド養成などを実施してきました。観光産業には総合産業型の特性があり、様々な業種や形態で雇用の場が産まれると見られています。

サイクル・ツーリズムは、スポーツ活動の範囲を超えて健康づくりや地域づくりなどの多面的な側面を持っています。サイクリストの移動・宿泊・飲食などは通常の観光活動に類似していますが、走行する道路や標識などは日常生活に直結しています。また、スポーツを通じた健康づくりや人材育成、地域間・世代間交流なども望まれています。様々な分野で経済効果が派生し、観光・スポーツインフラが整備されます。また、日常の生活インフラが充実し、人々の間の社会関係資本(絆)が蓄積されていくと指摘されています。アマチュアスポーツでも数多くの効果が見込まれるのに、プロスポーツの波及効果の範囲や大きさは計り知れないものがあると思われます。地域の誇りや自慢の種であることは間違いなく、青少年層の憧れのひとつともなっていると考えられます。長期的に地域に根差したスポーツとして定着していけば、幅広いサイクル関連業種が叢生していくと見られます。

この度の講演は、国内トップのロードレースのプロチームである「宇都宮ブリッツェン」です。国内レースに留まらず本場ヨーロッパの海外レースにも参戦しています。選手だけでなく、事務方のスタッフも抱えており、幅広い地域貢献を果たしているといえます。

なお、このセミナーには青森中央学院大学の学生を始め、青森県サイクル・ツーリズム推進協議会の会員や COC+事業協働機関、観光関連企業、自治体等の多くの方々に参加していただき、熱い議論が交わされました。

本報告書は、宇都宮ブリッツェンの活動実態と地域づくりの観点から、新たな雇用創出も含めて講演して頂いた要旨などを整理したものであり、これにセミナー参加者との討議内容や参加者へのアンケート結果を掲載したものであります。本報告書がセミナー参加者だけでなく、サイクル・ツーリズムに関心のある人や地域づくりの一環などとしてスポーツ・ツーリズムの振興などを検討している方々の参考資料となることを期待する者であります。また、雇用創出連携プロジェクトチームとしては、今後も引き続いて、国内外よりサイクリングやウォーキングなどを目的とした観光客などを青森県へ誘致していくための魅力ある環境づくりに取り組み、関連産業の雇用創出に寄与していく方針であります。

平成 30 年（2018 年） 1 月

青森 COC+推進機構 雇用創出連携プロジェクト
ツーリズム プロジェクトマネージャー 内山 清
(青森中央学院大学大学院地域マネジメント研究科
科長・教授)

次 第

サイクルスポーツ・ツーリズムセミナー

プロサイクルロードレースチーム「宇都宮ブリッツェン」と地域
～自転車振興を通じた雇用創出と地域づくり～

日 時：平成 29 年 9 月 12 日（火） 14：00 ～ 15：30

場 所：青森市文化観光交流施設 ねぶたの家 ワ・ラッセ
2 階 イベントホール

司 会：青森中央学院大学 地域マネジメント研究所

所長・教授 岩船 彰

◆挨拶

青森中央学院大学大学院 地域マネジメント研究科

科長・教授 内山 清

◆講演

プロサイクルロードレースチーム「宇都宮ブリッツェン」と地域
～自転車振興を通じた雇用創出と地域づくり～

サイクルスポーツマネージメント株式会社

（宇都宮ブリッツェン管理運営会社）

代表取締役社長 柿沼 章 氏

◆質疑応答

セミナーの概要

プロサイクルロードレースチーム 『宇都宮ブリッツェン』と地域」

～自転車振興を通じた雇用創出と地域づくり～

日時 平成29年9月12日（火） 14:00～15:30

会場 青森市文化観光交流施設 ねぶたの家 ワ・ラッセ 2階イベントホール

講演 「プロサイクルロードレースチーム 『宇都宮ブリッツェン』と地域」

～自転車振興を通じた雇用創出と地域づくり～

講師 サイクルスポートスマネジメント株式会社（宇都宮ブリッツェン管理運営会社）
代表取締役社長 柿沼 章 氏

プロフィール

栃木県足利市出身 1972年4月24日生まれ
2001年全日本選手権個人タイムトライアル日本チャンピオン

1990年に宇都宮で開催された、世界選手権ロードレース（現ジャパンカップの前身）の観戦をきっかけにプロロードレーサーを志す。

国内外のプロチームでのレース活動を経て、2009年宇都宮ブリッツェンの立ち上げに参加。2011シーズンをもって現役引退。

宇都宮ブリッツェンのチーム運営と、選手活動の経験を活かしての自転車安全教室や自転車と健康をテーマにした講演活動などを行う。

自転車ロードレースのメジャースポーツ化と、自転車の多様な魅力を発信していく事を目指して活動。

参加 90名

主催 青森COC+推進機構 雇用創出連携プロジェクト「ツーリズム」

（青森中央学院大学、弘前大学）

共催 青森商工会議所

後援 青森県サイクリング協会、青森県サイクル・ツーリズム推進協議会



柿沼 章 氏

柿 沼： 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、私は宇都宮ブリッツェンという自転車のプロロードレースの運営会社のサイクルスポーツマネジメントという会社が栃木県宇都宮市の方にあります。そちらのほうで代表を勤めております。柿沼と申します。今日はサイクルツーリズム、それから自転車を通じた地域振興ということで、こういうふうにとくさんの皆さんが遊びに、話を聞きに来てくださって、本当に感動してます。

少し自己紹介させていただきますと、私も、今は運営会社の話をしてはいるんですけど、元々は選手でやってまして、二十年以上ですね高校卒業してすぐこういう道に入って、当時はプロというか実業団というふうに言われてましたね。半日会社の仕事をして、お昼食べたら選手として活動する。これは会社の中で、会社の社員として活動しているというしくみがありました。実業団と言います。まだ日本のスポーツの中には実業団というしくみが残っているスポーツもありますけれども、自転車の場合だとそれがプロ化してきました、今ブリッツェンという地域密着型のチーム、どちらかという自転車メーカーさんとか、そういう関連企業さんが持っているプロチームがメインスポンサーについているプロチームが多い中で、我々が日本で初めて地域密着型のプロチームということで、活動が始まったんですね。今から9年前になります。

その頃は選手契約をすると選手を連れてくると契約金が発生しますから、お金がかかるので、私も辞められず走っていたという意味での選手だったんですけども、その前は実業団で走ってまして9年前に自分達のチームを立ち上げて、お金がないチームも走っている。だんだんチームの方も軌道にのってきて今は運営会社の方の活動をしています。

今日の演題に、ちょっと自分でやる資料作っておきながら、物々しいなと思うんですけど、サイクルツーリズムとか自転車を使った地域振興、こういう演題がついております。自転車を通じた雇用創出地域作り、ちょっと堅苦しいタイトルがついてるんですけど、我々の会社も今9年目にして、正にこういう活動を、正に真っ最中です。道半ばと

いいですか、むしろスタートしたばかりといった感覚で、毎日頑張っています。

今日これから1時間ちょっとですね、お話を皆さんと一緒にさせていただく中で、私もたくさん刺激をいただいて帰りたいですし、皆様方にもですね、何かこう、役に立つヒントとかが私の話の中にちょっとでもあればいいなと。私がただずらずら一時間喋るのではなくて、もし「それはどういうことだ」ということであればですね、手を挙げていただいて、いろいろ意見交換しながら、進めていければいいかと思っていますし、今日本中で自転車を通じた地域振興とか自転車を通じた地域の盛り上がり、こういったものが日本中で叫ばれています。ただ、「自転車なんとなくいいな」というのは皆さん肌で感じてくださっているんですけど、それをどういうふうに進めているのか、自分の街でどういうふうに進めていって、どういうふうに進展させているのか、皆暗中模索だと思うんですね。それは私も一緒です。何か一緒にお時間話す中で双方の刺激になればいいなと思っています。

私今朝、宇都宮から新幹線で参りました。8時半ぐらいの新幹線に乗ってきて11時半にはもう青森に着いちゃうんですね。早いんですね。あつという間でした。危うく函館まで行ってしまうところだったんですけど、つい先日の今日火曜日でしたっけ？日曜日までツール・ド・北海道というレースがありました。我々のチームの選手出場しております、今年は函館中心で開催されて私は運営会社の人間なんでレース現場まで行けなくなっちゃったんですけど、選手たちは飛行機にするんですけど、スタッフはやはり機材スポーツだっているのがありまして、車で機材を積んで行きます。ハイエースとかそういう大きな車で三台くらい連なってフェリーで行くわけなんですけども、行きはこの青森からフェリーで函館行きまして、帰りはレースが終わったその日に、その夕方にはもう片づけて、選手たちは次の日の飛行機に乗って、スタッフはもうフェリーに乗って帰ってくるんですね。夜の便でこちらにつきまして、正にワラッセの施設のすぐ近くの新町のところのホテルに泊まったようですね。スタッフは、そのことについてあまり触れないんですけど、きっとスタッフ連中は美味しいお酒を、青森の美味しいお酒を、いただいて帰ってきたに違いない。実際私も昔そうでしたから。「いや～レースどうだった？」と聞くと「大変でした」「大変で他の海外の人が強くて」と言うんですけど、スタッフの連中は絶対、青森の美味しいお酒をつい二日前にですね飲んで帰ってきたに違いないと。

そんな青森なんですけど、新幹線でこっち帰ってきまして、私宇都宮から新幹線の時は東京方面に行くことが多くて、新幹線の車窓ってつまらないんですよ。東京方面から来る埼玉とか東京の都内って新幹線の車窓から見るのものがすごく味気なくて、「家とか見るしかねえな」って、あまり外を見ないんですけど、今日はすごく外見ました。仙

台で乗り換えて、こっちに来るんですけど非常に車窓が美しく、もっとゆっくり進んでくれないかな〜くらいにですね、外を見てました。

というのも、私自称道マニアという、自称なんですけど、道がすごく好きで、ロードレーサーという職業柄、道路を使ってやるスポーツですから道を走ります。大体どのくらい走るかというと、月に3千kmというんですけど、プロ選手は大体月に3千kmというんですけど、一年でまあ3万km強。私二十年やりましたので60万kmくらい走ってるんですけど、というのが一つ。60万kmってほしい月行ってこっち帰ってくるくらいあるんです。という話の一つネタで言うんですけど、そのくらい走ってましたので、好きな道路、あまり好きじゃない道路あって、走りたくなる道路そうでもない道路いろいろあるんです。その青森に向かってくる新幹線の車窓から見た町並みとか道路は、走りたくなる道路たくさんありました。できれば新幹線から降りて、在来線で行きたいくらいの景色でしたね。

私の住んでいる、栃木県宇都宮市というのは皆さんご存知のとおり観光エリア指定で真っ平らなんですよ。坂が全くないんです。緑からちょっと、ちょうどこのきわにありまして、自分の住んでいるところから南に向くと、坂が全くないんです。一つもないんです。そういうとこにいて、そういうとこで練習していたので、こういう丘陵とかこういうものに非常に憧れがあって、走りたくなるような景色でした。

あっという間の3時間で青森の方に着きまして、新青森で新幹線降りたらもう青森色一色ですよ。ねぶたも真っ赤で。我々ブリッツェンも実はチームカラー赤なものですから、非常にテンションあがりまして、こちらの施設も赤いじゃないですか。皆さん座ってる椅子も赤で「なんだかブリッツェンみたいだな」と思ってますね、非常に嬉しくなっちゃったというのがこちらにきての印象でございます。

青森には非常に優秀な競技者も多くて、きっと皆さんご存知ないと思うんですけど、私の世代でちょっと先輩で、今八戸工業の自転車部の先生をしています大野さんという方が、知らないですよ、誰も。おっ、一人手が上がりましたね。大野直志さんという今50歳かな丁度。オリンピックも行ってる選手がいるんですよ。世界選手権でメダルをとるくらいの名選手が実は青森出身の選手でいました。その前、もうちょっと遡ると坂本勉さんという競輪選手が、ロサンゼルスオリンピックで銅メダルとってたりしてるんですけど、ご存知の方いますか。お、やっぱり同じ、あ！こっちの方が多くですね。やっぱりオリンピックすごいですね。そういう名選手もいますし、私の同世代でも青森出身の選手というのは何人もいました。優秀な選手はたくさん実は輩出をされてる場所なんですよ。私にとっての青森っていうのは…。

あとそれから今年日本選手権があったんですよ。自転車のオートレースの日本選手権、

ようする日本チャンピオンを決めるレースが階上町でありました。階上からきている人なんかいますか？もしかして。さすがにいないか。ちょっと海の方ですよ。階上の方で今年日本選手権ありまして、私が二十歳くらいの時だから 20 年以上前にやはりその階上で日本選手権があつて、その時は私も走りましたし、その後、ツール・ド・東北というですね、1 週間かけて東北六県を。仙台スタート、回って、仙台ゴールする 1 週間かけて走るレースがありました。今なくなっちゃったんですけど、河北新報さんがスポンサーでやってる大会がありまして青森ステージもあつたんですね。青森の田子町のステージがありまして、そこは私も走った覚えがあります。実はそんなに青森でやる公式戦はそんなに数が多くなかったので、私が青森に来た思い出というのはそういう…くらいなんですけど、今日は大体レースで行ってる時というのは、その土地の美味しいものを食べる時間もないので、今日こういうふうに呼んでいただくのが非常に楽しみで今日は参りましたけれども、皆さんにとってどうでしょう、私が参りました栃木県とか、宇都宮というのは何か印象ありますか。どうでしょう。

男性： 茂木。

柿沼： 茂木。ツインリンクもてぎ。

男性： 私の弟が勤めてます。遊びに行ったこともあります。

柿沼： 茂木ということにですね、サーキットがあつてインディカーのレースをやったりする場所がありまして、そこでも自転車の大会なんかやるんですけど、他にどうですか。栃木県とか宇都宮市で…

男性： 餃子。

柿沼： 餃子！はい待ってました！その言葉待ってました。他どうでしょうね。あんまり皆さんどこが栃木県か分からないと思うんですけど、餃子とっていただきました。それから茂木が出ました。日光もそうですし、那須町もそうなんですけど、観光地でいうところがあるところがあります。これが栃木県です。たまにテレビでやるんですけど、県別の地名度のランキングというのがありまして、そんなことやらなくてもいいのになと思うんですけど、栃木県は大体下の方なんです。青森っていうと、ねぶた祭あたりで誰もがすぐ印象があると思うんですけど、栃木県は意外と県単位では印象が薄いんですよ。栃木県ってどこ？みたいな。特に関西の人からしてみると、栃木県ってどこにあるのかわかんないし、栃の字が書けないという人も非常に多いと聞きますけれども、非常にそういうふうにして印象が薄いんだというのが私たちにとっては不名誉な話題でして、一個一個見ていくと有名なものあるんですね。日光とか那須とか皆さんご存知かと思えます。そういう一個ずつ見ていくといいコンテンツあるんですけど、県としての魅力、情報発信が弱いというのが一つ、残念ながら事実としてあるようですね。



宇都宮ブリッツェン立上げ

柿 沼： 私たちブリッツェン、9年前にチーム立ち上げた時に一番最初の企画書はチームカラーグリーンだったんです。栃木県の色。例えば国体とか言ったときに県の色ってあるんですけど、やっぱりグリーンなんですよ。山もあるみたいな感じでグリーンなんですけど、最初グリーンで企画書作ってたんですけど、進めていくうちに知名度ランキングの話もあったりして「栃木県はちょっと発信力が弱いな」みたいな印象もあって、逆を言えば栃木県民「奥ゆかしい」県民性なんだろうと思うんですけど、良く言えば。でもスポーツで、「奥ゆかしくなくていいよね」ということで、「じゃあ一番目立つ赤にしよう」という単純な理由で赤にしたという、そんな経緯があります。

今皆さんの方の印象として、栃木県の印象餃子というふうに言っていただきましたけれども、これちょっと私も誘導尋問みたいなところだったんですけど、どうでしょう。青森餃子どのくらい食べますか？どうでしょうね。我々は朝から餃子食べます……嘘です。全然嘘です。でも、餃子と言えばラーメン屋さんに行くかついてるのが、サブメニュー餃子じゃないですか、だいたい。ですけど宇都宮には餃子しか扱ってない餃子屋さんがあります。ライスすらない。餃子しかないんですよ。そういうお店もあるくらい餃子が市民の皆さんの日常の食事に浸透してまして、仕事帰りに餃子食べるとかですね。そんなふうに浸透してます。

今でこそ宇都宮の餃子というのが、全国区になって参りましたけれども、そもそも栃木県ってそんなに売りがなくて、今私どもの運営会社の会長を務めております、砂川という会長がいるんですけど、砂川は元々行政マンで、市の職員として働いてました。自身はスポーツマンなんでランニングやったりとか自転車やったりしてるんですけど、ちょうどその頃、観光商工課というところにいた時に、餃子の消費量が日本一だという数字が何かから来たようなんですよ。「餃子で売り出そう」というふうな感じで最初の発起人みたいなかたちで、始まったんだけど、その当時は市役所の庁内でも全然

相手にされなくて四面楚歌で、でも逆にそれが燃えてしまったらしくて、一生懸命やっていたんだそうです。それが山田邦子さんの番組で取り上げられたのをきっかけに火が着いて、東京でも売れ出して、逆輸入型で餃子が盛り上がってきたんだそうです。栃木県民は、皆東京を見ているから、東京で流行ったものを真似するんですね。地元でいいものがあったても、すぐに手出さないんですよ。東京で流行ると「おお」と言って、それに並ぶみたいなの。

そんな県民性があるって、餃子も東京の番組で取り上げられたのをきっかけにブレイクして、今では非常に大きな地元の産業になってます。「みんな餃子を食べに来てくれる」という、そういうような大きな産業になっているんですけども、その砂川が自身も自転車に興味でやってたものですから、地域振興にいいものというを色々探していて、自転車も一ついいんじゃないかと目をつけてたというんですね。というのは、このあと話にも出てきますけれども、ジャパンカップという国際レースを宇都宮市では四半世紀にわたって開催をしております。皆東京見てる中で、皆人も物も金も皆東京向いてる中で、何だったら栃木県が勝てるんだというのを考えた時に、餃子もいいけど自転車というのに目をつけて、自分が定年退職をしたら自転車を使った地域振興やろうというふうな心に決めてたんだそうです。

その頃私は全然砂川と面識ないですし、別のチームで選手として活動してたわけなのですが、私も同じ栃木県出身なんですけど、私のチームメイト、私の弟分にあたる広瀬というのがいるんですけど、これが宇都宮出身で、競技者としても優秀で、どんどんステップアップしていった本場のヨーロッパでもレース出ました。ヨーロッパのチームに所属して、ある程度自分がキャリアの頂点が見えてきた時に、これから俺何しようかなと思った時に、「地元でチームを作りたいな」と思ったんだそうです。それまでヨーロッパでは流行ってるけど、日本ではなかなか陽の目を見ないロードレースが、自分が人生かけて頑張ってきたスポーツが、日本でなかなか陽の目を見ないことへのフラストレーションがあって、ロードレースをカッコいいスポーツにしたい。というこの一心で、簡単な最初言った、最初は緑だったという企画書を日本に帰ってくるたびに、地元の自分の知り合いにですね、見せてたんですよ。こんなこと考えてるんだと。それをたまたま見かけた、さっきの餃子の砂川が、それを見て、「一回こいつと話そう」ということで、二人が交わったところからこのブリッツェンの立ち上がりが現実を見てきたというのがチーム立ち上がりの経緯でございます。ですから、餃子を誘導尋問したのはこういう訳でございます。まあ餃子からチームができたわけじゃないんですけど、そういう経緯がありまして、やはり地元の、地元を愛する心から我々ブリッツェンというのも出来てきたんですよという、そんなむりくりな話で話でございました。

柿沼： ちょっと前置きがだいぶ長くなってしまったんですけども。では資料の方進めて行きたいと思います。皆さん、今日は雨なんですけども自転車できた方がいいですよね。さすがにいいですよね。日常的に自転車乗りますよという方どのくらいいますか。おっ、結構あがりましたね。はい、ありがとうございます。まあ、我々はですねプロチームの運営ですから競技としての自転車っていうのを主に活動している会社ではあるんですけど、一口に自転車と言ってもいろんなきりくちがあると思います。競技はその中の一面です。国民の大半の皆さんが自転車というと足ですよ、移動手段。免許証を持っていない学生さんにとってはありき唯一の移動手段ですし、歩いて行くにはちょっと遠い時に下駄として使うのが自転車だったりします。ですけども、今回の演題にもありますように観光の側面だったり、それから健康の側面だったり、それから医療、運動療法なんて言葉がありますけども医療としての先駆者、それから教育もあると思います。もしかしたらもっといろんな角度があるのかもしれない。この中で、私共もいろんな活動、競技だけじゃなくいろんな活動をしているわけなんですけどそんなのを少し皆さんにご紹介していきたいと思います。

レジャー、観光、競技ですけどもレジャー白書という統計がありましてそういうのを見ますと、自転車に乗る人、レジャーとして自転車に乗る人頻度は問わずですね。移動手段としてではなくレジャーとして週に一回でも年に何回かでもレジャーとして自転車に乗りますよという方は 1300 万人もいるんだそうです。思ったより多くないですか？日本の人口の割合から考えると結構多い。よくよく考えてみると自分の身の回りにも、あのだこの何々さん自転車乗ってるんだってという方が実はいると思うんですよ。

それから、競技。皆さんツール・ド・フランスなんて聞いたことありますか？皆さんうなずいてらっしゃるから知ってますね。フランスを一周するレースなんですけど。このツール・ド・フランスに代表されるような海外のレースを、Jリーグもそうですね、今、Jスポーツという有料のCSで放映されています。民間の無料の地上波を民法ではやらなくなってしまって、今Jスポーツでいろんなスポーツやってますけど自転車もその中にありまして結構契約数で言うと自転車多くてこのJスポーツの中でも非常に人気のコンテンツになってます。

オリンピック、この間オリンピックが終わりましたがもっとやってほしかったスポーツ競技種目ランキングでいうとなんと一位になったそうですね、もっと観たかったというところで。Jスポーツの加入数、これCSなので視聴率ははかれないそうにして加入数、契約数ではかるそうなんですけど、800万世帯の契約があるんだそうです。これは日本全国の世帯数の約六分の一に当たります。かたやこっこのレジャーで自転車に乗る人、人口のだいたい十分の一、でいいですよね？そういう数の割合の方がスポーツと

しての自転車を楽しんでいたりみたりするという事なんだそうですね。

するスポーツとかみるスポーツとしてある意味メジャーな領域に入ってきているといえると思います。私が高校を卒業して自転車選手としてやっていくぞと言ったときは親から出ていけと言われてましたけどそのぐらいまだまだ日の目を見ない時代ですけど、今は少しずつスポーツとして認知して頂けるようになってきたという証拠でございます。では、先ほど皆様に映像を見ていただきましたけどロードレースってどんなスポーツなのかというのを写真を交えてご説明したいと思うんですけど。皆さんこれみおぼえありますよね？ちょっと言ってもらっていいですか？



ツール・ド・フランス

男性： ツール・ド・フランス。

柿沼： そうですね。この走る場所。

男性： 凱旋門。

柿沼： 凱旋門、行ったことある人。はい。皆さんお買い物に行かれると思うんですけど。このシャンゼリゼ大通りなんですけども年に二回通行止めになります。一日はパリ祭、それともう一個はこのツール・ド・フランスの最終日なんだそうです。このツール・ド・フランスはフランスっていうのはね元々観光立国なんですけど、観光客数が世界一の国なんですけど観光局が力を入れています。それはなぜかっていうとまた追って説明しますけども。

自転車ロードレースはですね、マラソンになぞえられることが多いです。街から街へ交通規制をかけて駆け抜けていきます。こういう風に皆さんの生活道路を止めてそこを駆け抜けていくわけですね。さっきみたいな街中を駆け抜けていくこともあります、こういうふうな自然の山の中を走ることもあります。アルプスとかピレネー山脈みたいな山脈を越えちゃうような、ツール・ド・フランスは毎年両方越えるんですけど、こういうダイナミックなコースもありまして。



ロードレースの醍醐味 山脈越え

柿 沼： 皆さん、道見てください。落書きじゃないんですよ。これ応援の、自分の応援している選手の名前を書いたりとかメッセージを書いたりとかしているんですね。一般公道です。交通規制をかけられるとはいえ一般公道ですよ。もう前日から皆さん泊まり込んで、お酒を飲んだりキャンプをしたりとか、ちょうどフランスでいうバカンスの時期とということもあって皆さん楽しみ上手。自分の目の前を通るのはたった一回です。たったの一回通過するだけなんですけども皆さんこれを待ちながら楽しんでる。テレビ中継を見ながらいろいろ想像をかきたてながら待っていて目の前を通る瞬間を心待ちにしているということなんだそうです。もちろんこの応援メッセージは主催者が後で消して回るという壮大な仕事があります。

そして今度はこれですね。皆さん、これはわかります？場所。ツール・ド・フランスはフランスの国の外まで出ます。EU圏内行っちゃいます。これはロンドンバッキンガム宮殿ですね。このツール・ド・フランスがロンドンをスタートした年の写真なんですけどバッキンガム宮殿にこのように多くのお客さんが詰めかけて盛り上がったと。ウィリアムさん、皇太子さんなんかも天覧試合でみえたんだというふうに聞いています。

ロードレースの特徴として、チケット収入が無いんですよ。こうやってたくさん何万人ものお客さんが来ても皆さん無料です。どこで収益をあげているかというと、よく見ますとスポンサーの広告が出てますね。ヴィッテル、これお水なんですけど。それからシュコダンというのは車のメーカーだったり、カルフルだったりこういうスポンサーさんに支えられて大会やチームが運営されているというのが一つの特徴です。チケット収入が無いスポーツ、日本のマラソンに近いですね。

マラソンにたとえられますけどもマラソンのように 42.195 kmという決まった距離は設定されてないです。街から街へなので 150 kmのレースもあれば 200 kmのレースもあ

ります。世界で一番長い公式戦ですとミラノサンレモというイタリアのミラノから南のサンレモというビーチがきれいなとこなんですけど、サンレモ音楽祭とかやっているとこなんですけど、そこまで 298 km というね、世界最長の公式戦がありますけど。これを決まった距離がない中で競争します。今日は 150 km、今日は 200 km、それぞれのコースの特性にあった人がチームの中心になってチームの作戦が立てられるという非常におもしろい競技なんです。

それからこれですね、皆さんフランダースの犬ってご存知かと思います。ベルギーにフランダース地方というのがありましてこのツール・ド・フランダースとかツール・ド・フランクとか言うんですけどレースの様子です。まだ 3 月の寒い時期にヨーロッパの 3 月頃という非常に寒いんですけどこの頃にやります。コースは見てみていただくとわかるように中世の頃に作られた石畳をわざと通します。もちろん選手にとっては大変なんです。ですけれどもここで、果敢に走る姿にお客さんが感情移入して応援するという様です。ちなみに、この選手が着ているウェアの色はベルギーの国旗の色だとお分かりになるでしょうか。皆さんベルギーと言えばワッフルとかチョコとかそういうイメージがあると思いますが、実は自転車、ロードレースが国技の国でもあります。もちろん日本もそうですけど 6 月の最後の週に各国のチャンピオンが決まるとその国のチャンピオンは一年間その国の国旗をあしらったジャージを着れるというのが慣例と言いますか、ルールと言いますか、なってます、この人はベルギーの国旗のカラーですね。日本チャンピオンはもちろん白と赤で日の丸のはいつているジャージを一年間着用します。まだブリツェンは日の丸のチャンピオンジャージを残念ながらまだ手が届いていないですけども 2 位、3 位。手が届いてないですけどこの日の丸のチャンピオンジャージを地元を持ち帰るといのも我々のチームの大きな目標の一つです。

このようにコースのゴールまで近くなりますとコースこのようなスポンサーボードが出てお客さん達はボードを叩いて応援をするというのも一つのロードレースの風景になっております。そういう長い距離を戦った末にチャンピオンになったという人は非常に大きな栄光を手にするわけなんですけども、うっすら後ろを見ていただくともう一人の人が手をあげているのが、ピントが合っていないですけどもわかりますか？優勝して手をあげた選手の後ろにもう一人います。実は。ピントが合っていないで見づらいかもしれませんがこれは同じチームの選手が喜んでます。

自分は全然あんな後ろの方ですけどなんで喜んでいいのかというと、賞金の分け前があるからだけではないです。だけではなくて、ロードレースというのは風をめぐる戦いで実はチェスとか将棋に例えられるんですけども非常に戦略が深い競技でして要するに自分が誰かのために風除けになってあげることがあるんです。自分を犠牲にして自分の

チームを勝たせてあげる。次の日はまた逆になるかもしれませんがオールフォーワンと言いますが、まさにこのオールフォーワンで自分が自己犠牲を払って時にリタイアさえしてしまうこともあります。時に自分の車輪ホイールをあげちゃうことすらあります。飲み物を取ってあげたり。

とにかく一人を勝たせるために他のメンバーは自分の犠牲、自分の成績をかなぐり捨てて戦う競技でもあってこれが非常に心に響くんですが、そういう意味で彼は手をあげているんだと思います。決して賞金の分け前があるからだけではないと思います。こういう話をするとたぶん何時間も喋っちゃうんできりがないのでこのくらいにしまして。どうでしょう、皆さんクイズですけど、これどこの国でやっているレースでしょうか？はい、そこの学生さん。赤いTシャツの。ヒント、あっ、そのたこやきくらいです。

男性： 日本。

柿沼： 日本、そう。たこやきって書いてありますからね。いくらワールドワイドの食べ物になっても、なかなかまだレース会場で売ってるものではないですね。これ日本の宇都宮でやっている大会です。自慢するためにこの写真を持ってきたわけではなくて、日本でもこういうふうな盛り上がりのしているレースがあるんです。最初、皆さんにご覧いただいたジャパンカップの映像ありますが、あの大会でございます。まさにお客さんの中をぬって走るような感じで大変な盛り上がりなんです。今年も皆さん、お手元にもお配りしましたが10月21,22で開催してますけど、ぜひみていただきたいです。ジャパンカップというレースがもう四半世紀にわたって宇都宮市で開催をされています。



ジャパンカップ（宇都宮市）

柿沼： 元々、経緯は若い人は知らないかな？中野浩一さんという競輪選手が競輪選手会にいるんです。皆さん、世代で知ってる方と知らない方いると思うんですけど競輪選手で中野浩一さん、アートネイチャーの人です。今は広告とかに出てすごい選手で日本では競

輪選手ですけど世界選手権の自転車トラック競技で 10 連覇したんです。野球で言ったら本当にイチローとか、ああいう選手に匹敵するような偉業です。

この中野浩一さんが世界選手権 10 連覇したことを記念しましてそれまでヨーロッパ大陸から出たことのないこの自転車の世界選手権をアジアに、日本にもってこようという動きがあったのが 1990 年です。私は当時高校生でした。誘致するにあたってやはり競輪の中野さんの活躍もあったのでトラック競技、競輪とかを誘致するようなイメージでした。日本の行政は我々の住んでいる宇都宮市とお隣の群馬県前橋市も誘致しまして誘致合戦になりまして前橋市の方に軍配があがりました。で、前橋市の方にグリーンドーム前橋という大きなドーム型の競技場ができました。負けちゃった宇都宮市我々の方はトラックではなくてロード競技、陸上と同じですね。トラックとマラソンがあるようにロード競技の方をやりましたところ、実はロード競技、非常に華やかな、世界的にみるとメジャースポーツということもあって各国の国賓の方が来日されたいということでこりゃすごいと世界選手権メモリアルとして始まったのがこのジャパンカップです。

ちょうど昨年が 25 周年でございまして、今年は 26 回目、来月に行われます。まだ発表できないんですけどすごい選手も来ます。ということでこの写真がその様子でございまして、ジャパンカップは地元の方も宇都宮のわりと郊外の方でやってるものですから、ただジャパンカップをやってるのは知っているけど自転車に興味のない方は見に行かないですよ。

ですけどちょうど 7 年前、8 年前からジャパンカップの前日にこの左下の写真クリテリウムという競技を宇都宮駅の真ん前に持ってきました。街中でやることによって皆さんが見に行かなくても自分達の生活圏内でやっている大会ということで受動的にレースをみてるような環境ができました。今まで、ああ、あれね、ジャパンカップね、あっちの方でやってるやつねって言ってたものが今まさに自分たちの生活圏内にやってきたわけですね。で、初めてロードレースをみてくださる方も増えました。ちょうど我々ブリツェンもこの頃に立ち上がったものですから一つこれも追い風になりまして盛り上がってきたというものでございます。来場者はこの二日間で 13 万人を超える方が駆けつけて見に来てくれまして、ですから餃子も 13 万食、ひとり一人前タイプでね。このくらい売れるということでございます。

ちなみにこのクリテリウムという競技、言葉があるんですけどこれは一周が短い。ジャパンカップでいうと一周が 2 km ですけどこれをぐるぐる回る競技でそういう小周回をぐるぐる回る、ある意味ショー的な要素を含めた競技の事をクリテリウムと言います。語源としては金魚鉢って意味なんだそうです。つまり、観賞するもの。相撲でいう地方巡業に近いです。そういうふうな文化としてヨーロッパではクリテリウムは広まって

いったんです。今ではこのクリテリウムというのがある意味ショー的要素を含んだガチンコのレースで、日本中で広まっています。このジャパンカップのクリテリウムが街中に来たということが日本中のサイクリストとか、それから各自転車に携わる皆さんにとって、おらが町でもクリテリウムをやるというモチベーションになったようでして年間の公式戦の中でこのクリテリウムの割合がずいぶんと増えました。

その他、栃木県内で各種公式戦を誘致しています。それは私たちブリッツェンにとってスポンサーさんにお見せできる公式戦がジャパンカップしかない、年に一回しかないというのはですね何とも分が悪いわけです。栃木県にはほかにもJリーグのチームもありますし、バスケットのBリーグのチームもあります。それから日光アイスバックスというアイスホッケーのチームもあります。どれもホームゲームがあるんですよね。ですからスポンサーさんやファンの皆さんにお見せできる試合がたくさんあるんです。ですけど、我々はチーム設立当初は年に一回しかないんです。他は活動が地元の皆さんにとって見えてこないというのがありまして、それはある意味栃木県の魅力を外に発信していますよということも言っていましたけどやっぱり地元の皆さんに見てもらうのが一番でそういうことから一生懸命大会を誘致しました。

今年、栃木県内で行われましたレース公式戦このぐらいありましてツール・ド栃木なんていうレースも今年から始まって、これは三日間開催なもんですからこれを全部数えていると12の公式戦が開催されました。一個しかなかったのがです。今では12の公式戦になりまして、これはつまり我々のチームが走るレース年間は50くらいあるんですけど12っていうと1/4ですね。1/4ぐらいの公式戦を地元で引っ張ってきました。これはもう血を吐くような思いでやっています。ここをみて頂くと県内の各町、市町の名前がついている大会があります。我々だけではとてもとてもこういうことは実現できませんで、我々が話を各県内の市町さんですとか良きパートナーに話を持っていきます。こういう大会をやりませんか？地域振興になりますよってということで話を持って行って皆さん方を説得して、じゃあやろうというようなパートナーが出てきた所とこういうようなレースが開催できることになったんです。

県内25の市町があるんですけどもそのぐらいの数のレースを開催できています。もっともっと増やしたいんです。年間スケジュール的にもこれ以上増やすと、もう、平日も走らなくちゃならなくなるくらいまでになってまいりました。

今、見て頂いたのは公式戦ですけどそれ以外にまさに今日の演題にも直接関わってくると思うんですが、サイクリングのサイト、青森サイクリングを拝見してきました。青森は走る場所として自転車サイクリストが走る場所としてロケーションとして抜群です。我々の住んでいる栃木県も比較的平坦が多いですけど山間部まで近いということもあっ

て比較的首都圏からの距離間も近いということもあって特に首都圏のサイクリストに好評いただいています。

だいたい我々が開催するイベントで一番大きいのがこの那須高原ロングライドっていうのが3000名ぐらいの募集があるんですけど60%くらいは圏外首都圏のお客さんです。まあ那須高原という観光地もあって、サイクリング+観光、サイクリング+食事とかまさにサイクリングツーリズムでのイベントとして首都圏のお客様に好評いただいています。だいたい募集すると一晩で一番長いコース、100 kmコースが一晩どころか今年は一時間位で満員御礼になったというような感じでございまして、また人気が出てきているということでございます。

青森サイクリングのサイトを拝見しましても非常に魅力的なコースがあって、さっそく私も走りたいなというような気持ちになりましたし、実際多くのイベントが開催されているのを皆さんご存知でしょうか？日本人であれば誰でも知っている八甲田山をのぼるイベント、それから海沿いを走るイベントとか、我々栃木県、海がないんですよ。海なし県なんで海の近くを走れるのは非常に惹かれるものがあるんですけど、こういうサイクリングイベントが栃木県内ではひじょうに盛んです。それがヒルクライムレースって簡単に言うと坂道を上るだけっていうのがありまして。

一番有名なのでいいますと富士山のヒルクライムがあるんです。富士山の5合目がゴールなんです。2000mのところ。下からよーいドンで上にあがるだけっていうにわかには信じがたいイベントがあるんです。サイクリストにとっては非常にこう目指すべきステージであって、また楽しみたいイベントでだいたい万人ぐらいの方がエントリーをされます。これもいきなりプレミアムチケットになっていて、出たくても出られないというそんな現象が起こっております。

お金を払って坂道を自転車で上がるなんてどうですか皆さん、考えられないですか？でもこのヒルクライムレースっていうのが非常に今、自転車の世界では人気なんです。先ほど伺ったところによると、岩木山のヒルクライム、八甲田山のヒルクライム、これがいま人気だということをお伺いしました。

私たちの住んでいる栃木県というのは先ほども申し上げたように首都圏からアクセスとか、平地が東京関東平野のきわにあるというロケーションからサイクリングに適した地形であるということが言えると思います。交通量が少ない平坦な首都圏で交通量、首都圏で平らな道って言ったらだいたい国道とかバンバンくるじゃないですか、ですけど我々が住んでいる栃木県では緩やかな田園風景があって、車があまり来なくて安心して走れるというのもひとつの地域資源かなと思います。

それから坂道でのもてなしですけどちょっとこれも意味わからないと思うんですけど

サイクリストは坂道が大好きです。坂をハアハア言いながらあがるのにお金を払ってくれる皆さんだということがいえます。東京からサイクリストが走りに来てくれて地域の魅力の逆輸入、さっきの餃子じゃないですけども東京の皆さんがきてくれることで、我々栃木県民もあつ自分たちが住んでいる栃木県がこうなんだなというのを認識ができていくということでございます。

時計を見たら思ったより時間が過ぎていてちょっと焦りました。ちょっと別の視点を。好きな人たちがもりあがっているのを一般の市民の皆さんからすると、ああいうね自転車乗りの人が楽しそうにやってるよね、でも自分達とは別に関係ないよねって思われてしまう今までのサイクリング自転車業界だったのが視点を变えますと自分事になります。まず健康増進とか医療福祉、これは誰にも言える自分事ですよね。

それから教育。お子さんお孫さんにとって自分事です。自分事の自転車としての話をしたいと思うんですけど。詳しくはまた話をしますけど、まず自転車ってほしいの家庭に一台あるじゃないですか。車で行くところを自転車に変えるだけで手軽にできて、ながら運動できるすごく良い運動なんです。俺は歩いているから良いよという方、実は歩き方もちょっと違う特性があります。これが健康増進とか医療福祉に役立つ大きな理由です。

それから教育ですね。我々ブリッツェンは今 100 社様を越えるスポンサーさんに協賛していただきながらなんとかなんとか活動しているんです。正直なところ申し上げますといわゆる競技、我々チームの広告価値、スポーツチームとしての広告価値っていうのは、ある競技がマイナーなゆえに正直そんなに高くないです。

じゃあなんでスポンサーさんが応援してくれているかという我々がお子さん向けの自転車教室なんか一生懸命力を注いでいるから応援する側の企業さんとしてはその企業さんの CSR として我々を応援してくれているという側面が非常にあります。だいたい年間 30 校くらいの学校を訪問してきまして自転車教室をやってます。これはボランティアとして行ってます。我々スタッフ、プラス現役の選手を必ず連れて行ってどこで自転車の交通ルールとか説明します。ルールだけでは解決できないことがたくさんあって、むしろその方が多くてそれはマナーだったり人と人とのコミュニケーションだったりすると思うんですけどもそういうルールは学校訪問の一日教室って行政の方がやってくださっていますし、警察のかたもやってくださることが多いですけどルールを教えてくださいが多いです。

我々はもうちょっとリアルな話をされていて、自分がルールを守っているのにルールを守っていない大人が向こうから来たらどうする？みたいな言葉で話します。そんな活動をしまして一年に 5000 人くらいの子供達に話に行っています。その場で単に自転車の

ルールを話すだけじゃなくて、サイクルスポーツの楽しさもちょっとずつ伝えてくれるのが我々のチームの使命かなと思って一生懸命やっています。

それから教育の側面でいいますと、子供達の自立支援ということも言えると思います。今、親御さんとしては子供達に自転車で行っておいでってなかなか言いづらい環境の中で自転車で走るフィールドっていうのも限られている中で、サイクルスポーツを通じて自分の力でどこどこまで行くっていう達成感が非常に子供達の自信をつけさせます。

私の住んでいる隣の群馬県の FM さんがやってるんですけど、前橋市から東京ディズニーランドまで利根川という川がつながっているんです。利根川江戸川っていう川で行けるんですけど。夏休みの特別企画みたいなので FM 群馬さんがやって、一泊二日で皆でディズニーランドまで自転車で行こうという企画がありまして、まあ子供達ですから距離で約 100 km以上 120 kmくらいあるんですけど、途中で一泊して川沿いに安全な道を使ってディズニーランドまで遊びに行くってのがあるんですよ。子どもたちにとっては100キロっていうのは、大冒険です。それを自分たちで行った先にはディズニーランドというご褒美がある。これは、夏休みの非常に大きな大冒険でして、行ったら当然ディズニーランドは楽しいですし、帰りは車で帰ってくるんですけど、こういう企画もやってる事例がありまして、我々も真似したいなと思ってます。

それからですね、これもまたちょっと意味が分からないと思うんですけど、「足を通じて地域に愛着」というあれなんですけど、自転車で走り回りますとその土地を感じます。坂道があったりとか、下りがあったりとか、風が吹いていたりとか、やはり自分の住んでる地元を知るのに、この上ないツールが自転車だと思うんですね。皆さん、車でブーっ と行くと、アクセルをフィッと踏めば坂道もシューっ と行っちゃうじゃないですか。でもたまに、自転車に乗り換えていただくと「あ、ここにこんな坂道あったのか」とか、「ここにはこんな木が生えてたんだ」とか「あ、ここにあったお店がなくなっちゃったな」とか、そういうことに気が付きます。自分の町が好きになる、というもの、と言ってますけども、そんな側面があると思いますけれども。



教育としての自転車

柿 沼： ではここ、説明していきますと、ちょっと先ほど申し上げましたけども、こんな風な活動風景になっていまして。大体、月に2回から多いと3回くらい行くんですけど、選手を連れて行って、子供たちに左下のように指導、指導といっても遊ばせているに近いんですけどね、あまり堅苦しいこと言わないです。自転車って楽しいなと思わせて、でも楽しい自転車を楽しく乗るにはこういうこと気を付けなきゃいけないよ、という話をしていきます。対象が幼稚園児の場合には、紙芝居を読んだりします。これは、スポンサーさんから支援をいただいて。実際、紙芝居って作るのって結構お金がかかるんですよ。イラストレーターさんに発注したりとかすると思いのほかお金がかかるんですけど、「ブリッツェンの選手が自転車に乗って図書館に行く」というストーリーになってまして。これは地元の図書館さんから少し製作費をいただいて作るんですけど、読んでるのがうちの選手なんですけど、今年アジアチャンピオンになった小野寺という地元の選手なんですけど、自転車はプロなんですけど、紙芝居はプロじゃないんですよ。めちゃくちゃ下手です。ものすごい棒読みです。これ、子どもたちの表情ですね。やはりこういう時代もあって、子どもたちの顔映していませんけど、子どもたちがめちゃくちゃ心配そうに見てるんです。これが非常にほのぼのしまして、「子どもたちに見守られながら、朴訥と紙芝居を読む選手」というね、何とも言えないこのシーンが私は好きで、写真をニヤニヤしながら撮る、というのが私の趣味になってます。

あと右の上の方の、生徒さんに脚を触らせているという図なんですけど、「どうだすごいだろう」というですね、脚に触らせて、筋肉自慢をしているうちのキャプテンなんですけど、アテネオリンピック日本代表の鈴木真理選手なんですけど、自転車教室の最後に、子どもたちの質問コーナーがありまして、そこでこんな風なシーンがあったというところですね。それから右下の方を見ていただくと、トラックが出てまして、自転車教室専用のトラックを作っていただきました。地元の日野自動車さんの方から車両提供してい

ただ、弱虫ペダルという人気漫画コンテンツがありまして、こちらの方の許可をいただいてデザインしたトラックで、毎週のように自転車教室に行く、というものでございます。

それともうひとつ、これは、皆様受付された際に、私たちの活動の概要の資料をお配りさせていただいたんですけども、その中にあるページなんですけどもブリッツェン、トップチームを頂点としたピラミッドのページがありまして、その中にあるページなんですけどもやはり、地元から優秀な選手を輩出するのがプロチームである以上、非常に重要なミッションといえますか、考え方であります。

今、私も9人の選手とプロ契約してるんですけども、地元出身、栃木県出身の選手は2人しかいないんですね。もちろん他県から来て下さった選手は大ウエルカムですし、みんな地元の皆さんに親しんでいただいて、良くしていただいて、応援されてます。でもやっぱり地元から、育ってきた選手っていうのを当然ながら育成したいと思っております。ただ今までは、子どもたちがやるスポーツの選択肢の中になかったのがサイクリングスポーツでして。子どもたちがやるスポーツ、サッカー、野球、バスケ、水泳、陸上、いっぱいありますけど、自転車という選択肢はほぼなかったんですね。

それはやはり、交通問題とか、それから自転車を買うという非常に大きなハードルがあったりとか、要因はいくつもあると思うんですけども、子どもたちがやるスポーツの選択肢に入っていないと、地元から育成するも何も、種まきがないわけですから、何も育っていないということで、今年度から始まりましたこのブリッツェンステラ、星という意味なんですけども、チームカラーをキッズらしいイエローに定めまして、小学生、4,5,6年生に限定して週に2回、やっています。平日水曜日は、宇都宮競輪場を使わせていただいて放課後に練習しています。日曜日は、一般公道、ジャパンカップのコースの方を使って練習しています。

毎週やるというのは、非常に手間がかかることではあるんですけども、小学校、この位の世代の子どもたちの成長の速さであるとか、吸収の速さに毎週驚いているのが我々でして、まだ4月から始まってまだ半年足らずですけど、真剣に「この子たちの中からもしかしてツール・ド・フランスに出れる子が出るんじゃないか」という風に本当に思わせる位の成長ぶりを見せてくれてます。

実際に今、私ども9分の2の選手、地元出身の選手と申しあげましたけれども、その資料の中に黄色の次にブルーのところがあると思うんですよ。それは、アマチュアの育成カテゴリーになってまして、このブルーから上がってきた2人が今トップチームで活躍してる訳なんですけども、まだ私たちこういう風に、中学生とか小学生に門戸を開いてまだ本当に何年かしか経ってないにも関わらず、その地元出身の2名は今年、ア

ジアカンピオンに輝いたり、今もヨーロッパの方に行っているんですけど、世界選手権の代表に選ばれたりということ。

もちろん彼らは、やはり才能はあるんだと思うんですけど、門戸を広くすることが、競技に入ってくる子どもたちを増やすことによって、自然な競争原理の中で、優秀な選手が育っていくというのが、当たり前なことだとは思いますが、だから日本の野球は強いし、サッカーは強いし、水泳も金メダル取りますし、そういうことだと思わんですけども、そういう中に自転車も入っていくということです。で、教育のところにありますので、あまり競技競技していないんです。

サイクルスポーツを通じて、ちょっとおこがましいですけど、人間形成っていうんですかね、そういう教育の部分、速く走ることが至上主義ではなくて、フェアプレーとか、日常生活においても優れた人間性の育成を目指しています。ということで、そういう趣旨でやっています。でも、この中から自ずと競技に興味のある子どもたちが出てくると信じています。



健康としての自転車

柿 沼： はい、それから健康の方に行きたいと思うんですけども、いくらでもお話ししたいことは沢山あるんですけど、時間が限られているのでどんどん行きたいと思うんですけど。

あの今、日本の社会で叫ばれています、高齢化社会に日本が突入していくということ、叫ばれて久しいですけども。ロコモティブシンドロームなんて皆さん聞いたことありますか？メタボリックシンドローム？ロコモティブシンドローム、知っている方？ちょっと少ないですね。ロコモティブシンドロームというのは、要するに、簡単に言うと、筋肉の衰えによって段々と自分で日常生活ができなくなっていくことを言うんだそうです。要するに、自然に年齢を重ねることによって、筋力の低下というのは誰しも起こることなんですけども、そこにサイクルスポーツが役に立ちますよ、というお話です。

見ていただくとですね。なかなか筋肉の名前言われてもパーツと思いつかないと思うんですけど、要するに、下半身の筋力の低下が加齢と共に顕著だというデータがあります。そういう中で、自転車が非常に役に立ちますというデータなんですね。この中で皆さん、日常的にウォーキングしてるよという方いますか？少ないですね。何人か手挙げていただいていますけど、デューク更家さん、活躍してはいますが、一日一万歩歩けばオッケーっていう風に叫ばれてた時代がデュークさんの前にありましたけども。ウォーキングがすべてをカバーできるという、「一日一万歩歩くことの神話」みたいなのがちょっとあった時期があるんですけども、実は、もちろんすごく良いことなんですけど、それだけでは充分ではないというデータです。

左の白黒の部分がウォーキング、真ん中がランニング、一番右が自転車のペダリング運動なんですね。どの筋肉を使っているかというのが分かる資料なんですけど、ウォーキング、ランニングっていうのは見ていただいた通り、ふくらはぎ中心なんですね。自転車になると逆に、ふくらはぎがほとんど動いてないんですよ。その代わりお尻とか腿の前とかが際立って色が付いています。ですから、ウォーキング、ランニングと比較して自転車運動というのは、似て非なるもの、全然違うもの、と言って良いと思います。

どっちが良いっていうことも言えません。逆に言うと、自転車運動（ペダリング）って、膝下の筋肉をほとんど使っていないんですよ、ですから、どっちが良いということではないんですけども、違うものなんですよ、ということです。人間の筋肉のことで言うと大筋群、大きな筋肉っていうのが、大きい筋肉、小さい筋肉から構成されていますけど、大筋群、大腿四頭筋っていうのが腿の前の方です。それから、大殿筋というのはお尻の筋肉ですね、この辺を使うのが自転車なんですよ、というデータでございます。

より大きな筋肉をダイナミックに動かした方が、その運動効率と言いますか、消費するエネルギーっていうのは大きいんですね。筋肉量が多い分だけ。ですから、車に例えると、自転車運動っていうのは非常に燃費が悪い運動と思ってください。ガソリンをがががん使います。ウォーキングは燃費が良い運動だと思ってください。人間の体の中に起こる、燃費の良い悪いっていうのは、どういう効果かという、がががガソリンを使えば、ガソリンが余らないのでこういうところにガソリンが残らないんです。どうですか皆さん、ここら辺（体を指している？）に付いてますか？こういうところに余剰分のガソリンが残ってないですか？それを燃焼させるにはウォーキングよりもペダリング、自転車の方がより良いですよ、ということが、ちょっと乱暴な言い方ですけども言える資料でございます。

じゃあ自転車が良いのかと、じゃあ買い物に行くのも自転車で行きましょう、今まで歩いて 10 分で行ってたのをママチャリで行きましょ。って言うんだとこれまた逆で

すよ。それは楽すぎてしまうので、全く負荷がかかってないんです。ですから、ちょっと坂道を入れてみたりとか、筋肉に刺激を入れることが非常に重要です。じゃあ自転車やろうかなと思った皆さん、何もスポーツバイクを買わなくても大丈夫です。お家にある、普通の自転車をちゃんと整備して下されば、スポーツとして充分効果が望めます。

道端カレンさんが書いてる本でこういう本がありまして。ポイントはちょっとサドルを高くすることと、ハンドルをちょっと低くする。これは、街の自転車屋さんに行っていればすぐにできます。ハンドルも低く、工具一本でできます。ちゃんと空気を入れて、ちゃんとチェーンに油を差してあげることによって運動効率が上がります。宇都宮の学生さんってなぜか、サドルが非常に低くて、なぜかそれが格好良いと思っている面があるらしいんですけど、サドルはちょっと高めにして、どの位かということ、地面に足を着いた時に踵がちょっと浮く位、べたっと着かないで、踵が浮く位の高さにして自転車に乗っていただくと、何が変わるかということ、お尻の筋肉を動かしやすくなります。人間って、自分の前面、前の筋肉って意識しやすいんですけど、自分の背面側の筋肉は意識がしづらいんですね。サドルを高くしてあげることによって、お尻の筋肉を有効に動かせるようになるというのがメリットです。

この反復運動、ウォーキングも自転車もそうなんですけど反復運動ですよ。皆さん聞いていることはあるかと思うんですけど、セロトニンという脳内伝達物質があって、幸せホルモンなんて言われたりするんですけども、これらの分泌は、朝日を浴びることと、反復運動をすることによって促進されるというデータがあります。ですから、太陽の下で自転車に乗るなんて言うのは最高に良いことで、是非これは推奨しております。

これに伴ういろんなデータもあるんですけども、ちょっと今日は時間の関係で割愛したいと思います。ちょっとここに、下に新たな仮説が、とあるんですけど、実はこれ、私のまだどこにも発表していない仮説なんですけど。サイクルスポーツだけ、サイクルスポーツと水泳だけにある実は特性があるんですね。皆さん、肩こりします？肩こりしますよね。肩こりと首こりっていうのありまして、肩こり首こり、結構悩んでる方いらっしゃると思うんですけど。

実は、プロの自転車選手に肩こりっていないんですよ。初心者の方は、ハンドルしっかり握っちゃったりするから肩こりになるかもしれませんが、自転車に乗ることをある程度極めてくると、肩こりがなくなります。それは何でかということ、肩甲骨がすごく柔らかく動くからなんですね。四つ足動物の時に帰る運動がこれ、自転車と水泳だと、私の持論なんですけど、これ仮説なんですけど、何の根拠もありませんけど。肩甲骨が柔らかく動くようになると、肩こり首こりが解消されてくるのではないかという話なんですけど、ですので自転車の良い側面がありますよ、という仮説でございます。



自転車文化が薫るまち

柿 沼： ということで、ずらずらと喋ってきてしまったんですけども、時間も差し迫ってきてしまいました。まだたくさん話したいことはあるんですけど、我々、宇都宮ブリッツェンというプロチームが旗振り役となって今後地元で、色んな目標と言いますか、構想を描いているかと言うと、左上にあります「自転車文化が薫るまちづくり」に貢献したいという風に考えております。

下からちょっと読んでいきますと、移動手段としての自転車の話なんですけども、公共交通機関と並ぶ重要な移動手段として、行政や企業が自転車を推奨。他の交通機関との連携、と書かれてあります。実は宇都宮市、LRT という路面電車の導入が決まりました。施工が間もなく始まって行くんですけども、LRT で行ける路線は限られています。それで市内全部カバーできるわけじゃなくて、やはりバスとかそれから自転車、こういったものとの連携が必要になってくると思います。これまでの、物流優先の道路づくり街づくりからシフトしていこうじゃないかという時に、自転車が役に立つわけで、そういうところで自転車をどんどん街づくりに使っていただきたいなという考えがあります。これはもうすでに、着手と言いますか、いろんな働きかけをしております。

そして下から 2 番目ですね。健康・教育の側面から市民に自転車が普及。「健康のまち宇都宮」を目指すということです。それから、ロードレーサーが子どもたちの憧れの対象になり、育成システムが確立。先ほども申し上げたように、子どもたちの選択肢、子どもたちが憧れるスポーツにサイクルレース、ロードレースがどんどん成長していくことを目指しています。

そして、常設のサイクルスポールビルを作っていただきたい。これも強く要望してまして、やはり子ども、それから初心者の方にとって交通の中で自転車を楽しむって結構大変なんですよね。楽しむ以前に怖いとか、事故に遭っちゃうとか、そういうリスクがあります。ですので、安心して走れる場所、他の交通から離れてサイクルスポーツを楽しむ場所というのを要望、強くしております。

栃木県は、2021年に国体があるということもありまして、色んなインフラ整備が進んでるんですけども、そういうところに自転車の走るフィールドもお願いしてまして。例えば、これと言えば管理道路を、例えば一時的にサイクリストに開放して下さいとか、そういうことでもいいんですということで、要望を入れさせていただいておりまして、何とか全日本コースが作っていただけそうなところまで来ています。でも、一か所ですべて完結するわけではないので、いろんな場所に、子どもたちにとって、自分たちにとって日常生活の範囲内にそういう場所があるといいなと思っています。

それから、県内各地でレースが開催されるというのはもう、頑張っただけ今年実現しました。もっともっと広報力を強めて、開催しても社会的影響が少ないのでは、やっても意味がないというか、競技者だけにしかメリットがないので、それが社会に貢献できるような発信力の強い、レースイベントにしていきたいと思っています。

そして、国内最高峰のロードレースリーグでブリッツェンが活躍、と言われるんですけども、これが今まさに選手たち奮闘中で、実際にタイトル、日本のタイトルを取る取らないのところで活躍しているんですけども、それはやはりタイトルを取って優勝してもですね、世の中の人に感動を伝えられなければ何の意味もない。やはり、優勝して活躍して、それを世の中の皆さんに喜んでいただいて初めて我々プロスポーツチームは仕事が完結する。ですからある意味、感動産業だということを、選手たちにも常々話をしております。

そして、この2つはまだ実現に至ってないんですけども、今、国内の活動を主戦場にしてる我々ブリッツェンなんですけれども、ロードレーサーを志す者はみんなツール・ド・フランスを目指します。ヨーロッパに行かなきゃだめだという風に言う人もいます。そういう中で敢えて国内に留まって、国内のロードレース産業を充実させるというスタンスでチーム内やっていますけれども、それがきちんと出来てくる前に、次の目標を定めようと思っています。

来年10周年を迎えるブリッツェンなんですけども、次の10年の中でブリッツェンが世界に出ていきますよ、ということを目指して打ち出したいなと思っています。国内のチームはそのまま、活動を維持したまま、もう一つグローバルチームを作って、世界を遠征する。こういうことを目標に、頑張っただけで行きたいと思っているんですけども、ただそれにはなんとんでも先立つもの、予算が要りますので我々運営会社の方がしっかり頑張っただけじゃいけないんですけども。

最後にやはり、地域密着型の我々ブリッツェンとしましては、競技者だけ、サイクルスポーツに係わる人たちにだけに支持されるのではなくて、多くの市民の方に、県民の方に支持していただかなければいけないと思っています。「自転車のまち宇都宮」と標榜

していただけてますけれども、その先にあるものは「健康のまち宇都宮」「健康のまち栃木」なんじゃないかと思っています。そのための一つの旗振り役として、我々が活躍して行くというのが、地域の中での我々の役割なんじゃないかと思っています。こういったものが、全部実現して行って、より充実していくことによって、より自転車文化が薫る地域、町になっていくというのが、我々の活動の目指すべき大きな目標なんじゃないかという風に、これまでの九年間の活動の中で感じるわけでございます。

たいそうな話を最後にしてしまいましたけれども、資料としてはこれで最後のページになるんですけれども、皆さんどんな風にお感じになったでしょうか。今日聞きに来てくださった皆さん、これから自分のお住まいの青森の中で、自転車を使って何か考える中できっとそれぞれ考えがあると思いますし、想いもあると思います。何かのお役に立てれば、本当に今日こちらにお邪魔させていただいて、貴重なお時間をいただいた甲斐がありました。私の方からの話はこれで終わりとさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

司 会： 柿沼様、ありがとうございました。サイクルスポーツと言うのは、非常に多面的な側面を有している文化産業であり、観光産業であり、健康産業であり、最終的には感動産業というイメージで収斂していくはずだ、というようなお話だったと思います。お約束の時間、若干短くなりましたけれども、会場の皆様の中で、柿沼様とお話したいという方があればマイクをお持ちしますので、どうぞ遠慮なく手を挙げていただければと思います。



質疑応答

質問 1： 私、一般で参加させていただいている高坂と申します。今日はどうもありがとうございました。子どもたちに自転車というのは、今の時代では大人もそうですけれども車社会の時代ですから、なかなか乗りづらい。また「乗せられない、乗せない」というか、小学校あたりでも「自転車乗っちゃいけません」また親としても、「危ないからやめなさい」と言うことは、車も多いけれども、やっぱりその道路事情とか、環境が整備されていないからだと思うんです。非常に体に良いことはわかるんですけれども、青森市内ではなかなかその環境の整備が整っていない。また、公園では自転車は乗ってはいけませんとか、いろんな制約があって、なかなか子どもさんに自転車買ってあげたけども、長い距離を乗っちゃいけないとか、そういうことで非常にジレンマに陥っているのではないかと。

一つそこでお伺いしたいんですが、栃木県もそうですが、特に宇都宮としては、お宅様のこの働きかけでそういう環境整備、子どもに良い環境という、行政の方として、どんな協力をしていただいているのか。そこちょっとお聞きしたいと思うんですが、よろしいですか。

柿 沼： ご質問ありがとうございます。行政のお立場から私どもご支援いただいているというのは、先ほど申し上げました自転車教室を、教育委員会さんが窓口になって下さっていて、市内の小中学校に展開して下さってまして、要するに市内、例えばこれは宇都宮市内の話なんですけど、宇都宮市内にある小中学校に対してこういう風にブリッツェンの地域活動があると、ついては希望がある学校さんは連絡を下さい、というその取りまとめをして下さってまして、具体的にはそういうものがまずございます。

ただ、実際学校さん側っていうのは、校長先生同士の横の連携と言いますか、教育の場って横の連携が非常に強いじゃないですか。ある学校でこういうことをやりましたって言うと、「あ、そうなの？うちの学校も呼びたいよ」というような感じでどんどん自発的に私どもの会社の方に電話下さっているんで、今ご要望いただいたすべての学校に

実は伺えていないというような状況ではあるんですけども。

あとは市の、宇都宮市の方で実施している自転車教室の方にゲストで呼んでいただいたりということが具体的にございます。それから今、子どもたちの体力低下が叫ばれております。そういった中の一つの、子どもたちの体力アップの方法としてサイクルスポーツも取り上げていただいたり、ということもひとつ、事例がございます。これは県の方なんですけれども。

司 会： よろしいでしょうか？

質問 1： 道路環境の方はどういったもんですかね？

柿 沼： 道路環境ですね。実際道路環境で申し上げますと、青森市内ってどうでしょう、ブルーのレーンってあります？車道の端っこをブルーに塗ってある自転車レーンってあります？ないですか？実はあの…

質問 1： 歩道上に、黄色い線を引いて、ここが自転車道ですよと表示しているところは一部ありますけども。

柿 沼： そうですね。今、ちょうど道交法、自転車にまつわる道交法の改正などもあって、ちょっと前まで「自転車は歩道の上を走りなさい」と言っていたところから、3年前の10月だったですかね、「自転車は車道に降りなさい」という風に一気にシフトチェンジしましたよね。都内とか実は宇都宮の、ブルーのレーン、自転車専用の通行帯っていうものの施工がかなり進んでまして、総延長で言うと、おそらく栃木県の中にあるブルーレーンっていうのは、日本で一番長いと言われてるんですけども、宇都宮市内だけでも20数キロ分、それでもたったの20何キロかと思うんですけど、それくらいの自転車専用通行帯があります。それは、車道に引かれてます。

でも、子どもたちにとって、13歳未満の子どもたちは、あらゆる歩道を自転車で通って良いことになっていきますので、小学生以下の子どもたちは歩道を通ると思うんですけども、その色分けなんかも始まってはいるんですけども、実際にはまだ道交法の改正から、それが実際の道路に施工されるまでには、まだほんの一部しかできていなくて、そういう過渡期にありまして。子どもたちは実際、どこを走っていいのか、というのがまだ全く、一人一人の子どもまで、親御さんまで浸透していない状況ではあります。それは、何かにつけて我々の方、我々や自転車に関する有識者のみなさんが色んな場面で「自転車はこういうところを走るんだよ」というのをみんな声を揃えて同じことを言っていく、ということが大事な時期かなと思っております。

司 会： あの、時間が超過しておりますけども、もうお一人かお二人…。はい、どうぞ。よろしいですか。

質問 2： オガタと申します。今日はお話ありがとうございました。これから話すことは、話し

ていただいた柿沼さんに質問というよりも、ここにいる皆さんに、特に行政の関係の方がいらっしゃったらみんな考えていきたい問題なんですけれども。

今の話の延長なんですけど、私は行ったことはないんですけど、ヨーロッパをずっと旅した人が、非常に自転車の文化がある。自転車専用のレーンもあったり人々の生活とか日常生活に非常に自転車が根付いている。一方で日本はそこがまだ程遠い状態だと思うんです。私、ずっと長野にいまして。2年前に青森に来たんですけども、山のスケールだけ見れば長野は素晴らしいんですけども、こっちは海あり山ありの非常に素晴らしい空間がある。

例えばなんですけど、今は私、岩木山という山のすぐ麓にいるんですけども、岩木山の周りを一周すると5キロ位あるんですね。ツーリングトレーニングにすごい素晴らしいルートだと思うんですけども、交通量もそんな多くないですし、例えば、自転車専用レーンを作るとか、ああいう風にしてサイクリストが安心してサイクリングをしたりトレーニングしたりできるっていう、そのモデルコースみたいなのを作っていただけたいなというのをすごく感じてまして。

さっき、地形も地域資源というお話があったんですけど、まさしく青森だけじゃないんですけども、ここはこういう場所がすごいあるので、ただこれは個人個人がいくら頑張っても非常に厳しいことなので、行政の人たちと手を取り合いながら、そういうモデルコースを作ったり、そういう環境を整えていくことが非常に大事になってくるなというのを感じています。

質問ではないんですけども、ちょっと感じたことを話させていただきました。どうもありがとうございました。加えてなんですけど、もし、この中に県の行政の関係の方いたら、ぜひそういうことを一緒にやっていきたいと思いますので、あとで声かけて下さい。どうもありがとうございました。

司 会： それではあと一人限定になりますけど、どなたか。

質問 3： すいません、お話しいただきありがとうございます。学生さんが結構見えてみたいなんで、ちょっとその辺から、競技の方の話を教えていただきたいなと思ひまして。ブリッツェン、実業団としてやってるんですけども、その入団テストってありますか？最低限これだけは、プロを目指す人が最低限これだけのラインは必要だとかいうような、さっきの走行距離じゃないんですけど、そういう感じのライン引きというのはどういう風にしてしているのか、その辺を是非教えていただきたいです。

柿 沼： はい、ブリッツェンには育成のピラミッド、育成のシステムが構築しつつありまして、プロの、赤をモチーフとしたブリッツェンの下にブラウブリッツェン、青いブリッツェンですね。その下にブリッツェンステラという、黄色の子どもたちがあります。簡単に

言うところの3色なんですけれども、ブラウブリッツェンは、毎年11月に入団トライアウトやっております、決まった区間のタイム計測をさせてもらった他にブラウの方のコーチたちとの面談なんかもちょっとさせていただいて、で、おこがましくも合否という形で、どうしても受け入れ体制に限りがあるということで、合否を付けさせていただいて受け入れています。

ブリッツェンステラの方も、4月、年度でやってるものですから、3月にトライアウトをさせていただいて受けさせてもらってます。ですけども、それぞれ皆さん、学生さんだったり、職業を持ちながらサイクルスポーツに打ち込む時に、勝利至上主義、要するにタイムが良ければいいとか、強ければいいということだけではなくて、その競技に対するその考え方とか、限られた環境の中でどれだけ真摯に取り組んでるかっていうのも、ステラの方もブラウの方も、責任者では見ているようです。

質問3： 走行距離とか、これくらいの受賞歴が必要だとか、そういうのはあったりするんでしょうか。

柿 沼： 過去の経歴は問いません。お笑い芸人の安田大サーカスの団長も入団試験受けてくれて、ちゃんと受かりました。番組上、裏口じゃないですよ。ちゃんと試験受けて受かりました。以前、片山右京さんも私共のチームに所属してくれてたんですけども、これはあの、録音してたらあまり言えないんですけど…。右京さん、非常にお忙しい中で、2年ほど登録してくれて、このジャパンカップのクリテウムも走られたんですけど。右京さんのような方でも、懸命に努力をしてくるんだなっていうのがすごく、感動しまして。

私も、要するに右京さんを選手で走らせるということは、うちの選手の席を一つ潰す訳で、それは最初反対したんですよ。だけど、右京さんと接してる中で、それだけ真摯に取り組んでる右京さんだったら、ブリッツェンの一員として走ってもらうに相応しいなと思って出てもらったという経緯があるので、強い弱い以前の部分、モチベーションの部分が一番かなと思います。

質問3： はい。ありがとうございます。

司 会： まだまだご質問あるいはご意見がごありとは思いますが、ご予約の時間、5分ほど超過しましたので、これでサイクルスポーツ・ツーリズムセミナー終了、ということにさせていただきます。

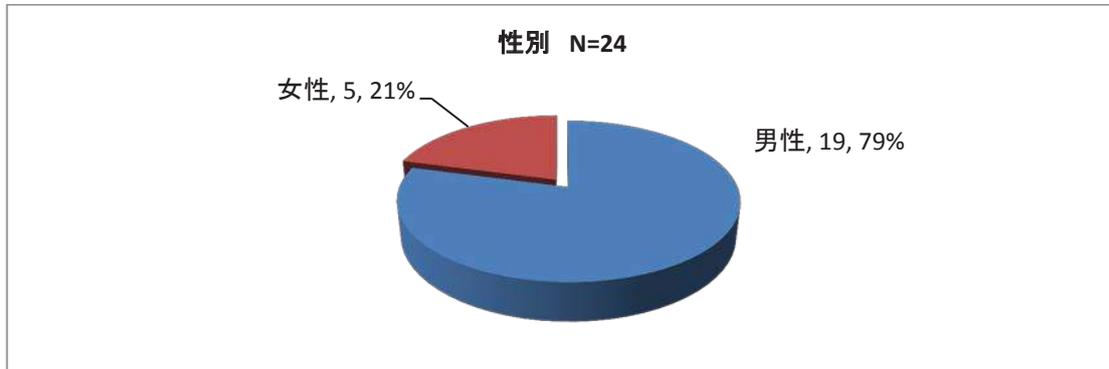
最後に講師の柿沼様にもう一度、盛大な拍手をお願いいたします。

(閉 会)

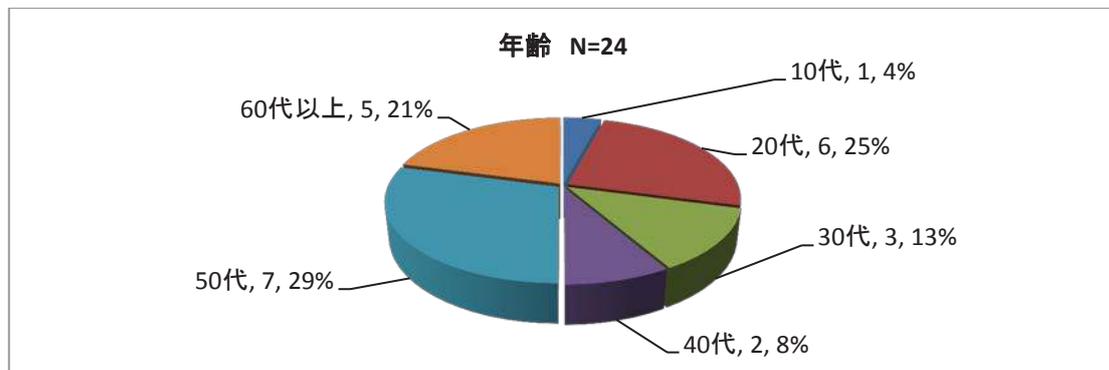
参加者アンケート集計結果

アンケート回収：計24（男性19、女性5）

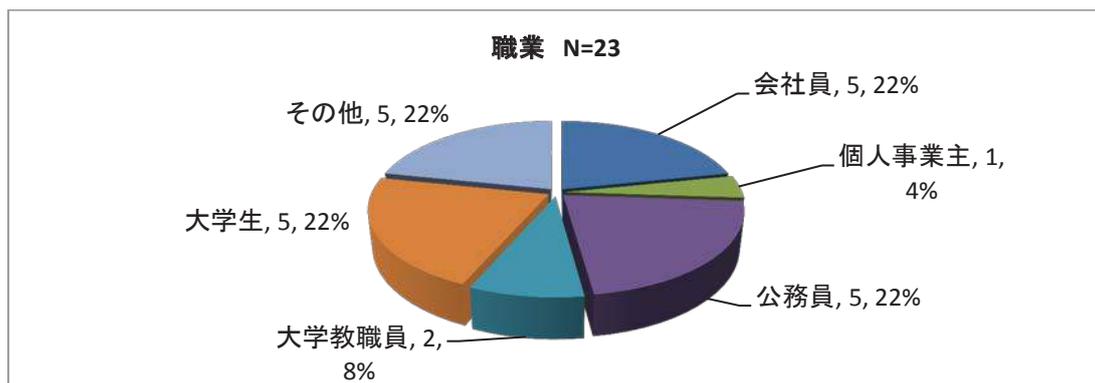
1. 性別



2. 年齢

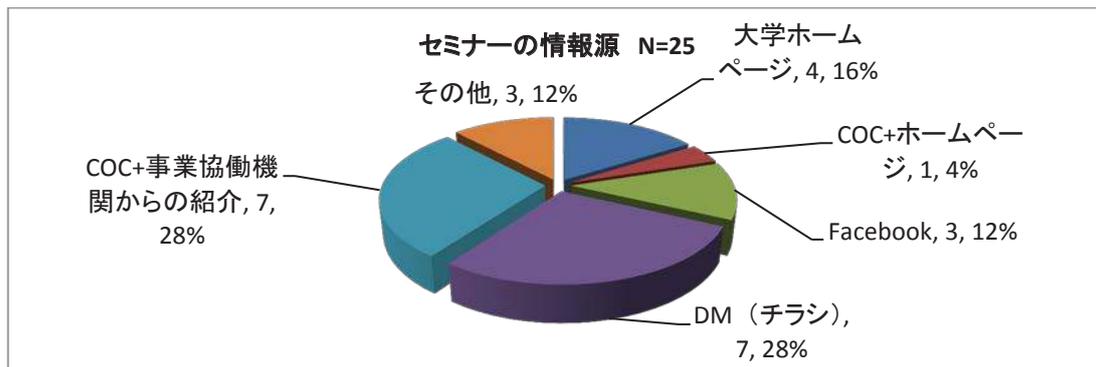


3. 職業



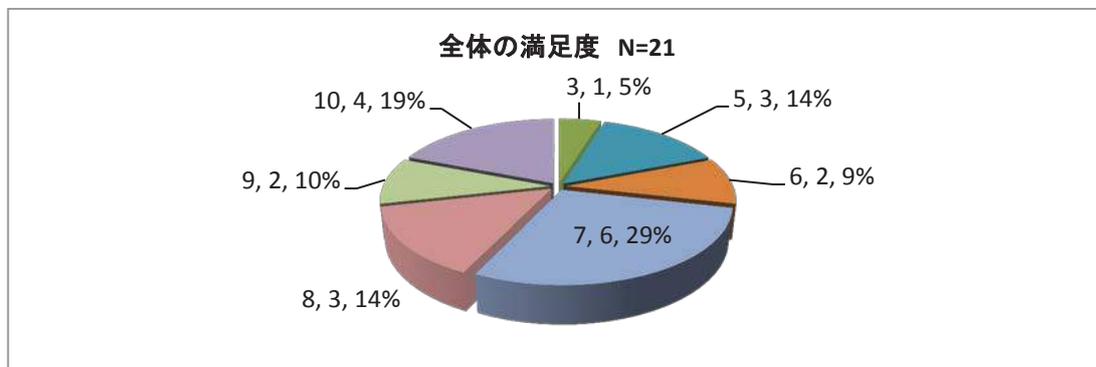
その他（団体職員、下北を知る会事務局、主婦、無職）

4. セミナーの情報源



その他 (青森県サイクル・ツーリズム推進協議会、設置チラシ)

5. 全体の満足度



感想

良く理解できた。すばらしいセミナーであった。

新たなことに取り組む人材とそれを支える社会基盤の重要性を感じた。

地域とのかかわりについて、運営会社としてのあるべき姿について大変参考になりました。

今回の話を聞いて、自転車は、教育や健康やスポーツにとってもいいことがわかった。スポーツでは、ロードレーサーでキョリはきまっていないが、いろんな町のつこうしている所を自転車で走って、そのチームがかてるように自分がぎせいになってもチームがかてるようにしている所がすごいと思いました。

スポーツを通じた街づくり貢献が出来ることは良い事と思います。もっともっと輪を広げてほしい。

サイクリングイベントが自分の知らない所で、いろいろと開催されていて驚いた。話を聞いて栃木県はサイクリングに本当に適していると思った。

「サイクルスポーツ」については、初めて聞く講演でしたが大変勉強になりました。(内容も教育的であり、「うなずき」ながら聞き入りました)県内でも「ジュニア」のチームの育成に取り組んでほしいものです。

はじめて聞く内容の講演だったので、非常に新鮮にお話をうかがいました。もっとたくさん色々な話をきいてみたいと思いました。

宇都宮ブリッツェンの立ちあがり、頑張りがよく分かった。雇用創出の視点ももう少しきたかった。

楽しいお話しであり、非常に勉強になりました。

サイクリングして50年、最近シティーバイクできたえてます。あらためて、体に良いと感じ、これから100km目標にがんばってます。冬はスキーやってます。今年からスノーボードもはじめます。ロードバイクもかつて乗りました。

楽しく聞けました！

大変参考になりました。県内でのサイクルスポーツの振興に役立つ情報でした。

私はボウリング部に所属していて、ボウリングのプロなどは働きながら大会に出ているなど、競技だけで生活している人はほんのわずかしきません。その中で、自転車競技は、地域などと協力してプロチームで活動していて、ボウリング業界でも見習わないといけない部分もあると思った。

ロードレース(自転車競技)が盛んになれば経済的にうるおう、と云うのが良くわかった。欧州みたいにプロサイクルが盛んになればいいと思った。

自転車を軸として様々な分野へ波及する効果を分かりやすく説明頂いた。

・サイクルスポーツの良さがとても伝わった。
・青森市もユースや試合などを誘致していきたい。

・サイクルスポーツの魅力が伝わった。
・青森県はサイクルコースに適した地形である為、サイクルツーリズムの可能性が高いと感じた。

・サイクルスポーツの今後のあり方・進め方、公式戦、大会を行うこと。
・自転車での筋肉のつきがちがう。(坂道でないとダメ)

感想

自転車を利用した誘客(サイクルツーリズム)という視点で考えることが多かったが、地域貢献にも大いに力を発揮できるコンテンツだと気づかされた。誘客と地域貢献の両方で自転車というコンテンツを考えていきたいと思った。

コースもはしる距離もすごいなと思いました。

自転車を通じて健康や教育に役立てていくことで、どんどん地域社会の活性化につながっていくと思いました。

意見

自転車について考えてみることはなかったので理解を深めることができました。県内市町村にもこのような内容のもの広めていくべきと考えます。

サイクリストが巡るコース(道路)の整備が不十分な所もあると思います。道路環境がもっともっと充実していけば良いと思います。

ジャパンカップ見にいこうと思います!!30代にヨーロッパで自転車カンキョウが良いと思いました。やっと日本もそういう時代になれば良いと思います。64才です。

マイナースポーツの楽しさを広めるには、どういった事が大事ですか？

説明していた資料も配付してほしい。細かくて見えない。

移動で使う自転車が経済を生み、いろんな用途があるとは、とても、たのしく、一つでも達成できたら…青森も…ありがとうございました。

身近であるが、プロスポーツとして認知度をいかに高めていくか課題だと思った。同じチケット収入のないマラソンや駅伝が成功しているので自転車も大いに期待できると思う。安全面が1番の課題ではないでしょうか。ありがとうございました。

このような活動をたくさんの地域に広めてほしいと思います。

講演資料、他



『宇都宮ブリッツェン』活動概要

会社概要

会社名:サイクルスポーツマネジメント株式会社

本社所在地:栃木県宇都宮市今泉町2995-9

設立:2008年10月

【設立目的】

地域密着型のプロ自転車ロードレースチームとして世界と戦える選手を育成するとともに、関係機関と連携し、日本ロードレースのメジャースポーツ化に取り組んでいく。また国内ロードレースの活性化、魅力あるレース創り、ロードレースファンの拡大、地域活性化や貢献活動、行政との協働など、自転車文化全体の創造を目指す。

【事業内容】

■ チーム運営

宇都宮ブリッツェン(ロードレース)
宇都宮ブリッツェン・シクロクロスチーム(シクロクロス)
ブラウ・ブリッツェン(下部育成チーム)
ブリッツェン・ステラ(ジュニア育成チーム)

■ サイクルイベント(一般ユーザー参加)企画運営

うつのみやサイクルピクニック
那須高原ロングライド
八方ヶ原ヒルクライム、ツール・ド・NIKKO

■ レース運営

宇都宮クリテリウム/宇都宮ロードレース
那須塩原クリテリウム/那須ロードレース
大田原クリテリウム/やいた片岡ロードレース
タイムトライアルチャンピオンシップ(栃木市)
ジャパンカップ サイクルロードレース(宇都宮市)
宇都宮シクロクロス

■ 施設管理事業

宮サイクルステーション、サイクリングターミナル
(指定管理者として業務受託)

■ 地域貢献活動

補助輪外し教室、自転車安全教室、介護予防事業、
交通安全講話など



地域密着型プロ自転車ロードレースチーム 宇都宮ブリッツェン

～地域の輪を広げます～

宇都宮ブリッツェンは栃木県宇都宮市を拠点に、スポーツ自転車の普及と自転車文化の発展、そして環境に優しく健康にも良い、自転車の持つ多様な側面から地域社会へ貢献したいとの思いから2008年10月にチームを設立、2009年のシーズンよりプロロードレース活動を始めました。

国内最高峰のシリーズ戦である「Jプロツアー」や、国内での国際レースを主戦場とし、勝利を目指すことはもちろん、日本国内におけるレース文化の発展を目標として、各種レース情報の配信などを積極的に行っております。また、自転車安全教室の実施や介護予防事業など、自転車およびスポーツを通じた地域貢献活動にも取り組み、宇都宮市の地域活性化、健康都市作りなどにも協力し、ホームタウンである宇都宮市をはじめ、栃木県の魅力をより多くの皆様に発信すべく活動しております。

【おもな戦績】

Jプロツアー：年間チーム総合優勝2回(2012、2014年) 年間個人総合優勝(2012年、増田成幸)

UCI公認レース：ツール・ド・北海道 個人総合優勝(2016年、増田成幸)

ツール・ド・おきなわ 優勝2回(2014、2016年、増田成幸)

3



2017 宇都宮ブリッツェン チーム体制



雨澤 毅明

(下野市出身)

馬渡 伸弥

飯野 智行

増田 成幸

鈴木 諒

岡 篤志

小野寺 玲

(鹿沼市出身)

阿部 嵩之

鈴木 真理

ゼネラルマネージャー：廣瀬 佳正 監督：清水 裕輔
アシスタントマネージャー：曾我部 正道 メカニック：田村 遼
チームドクター：牛島 史雄 チームマッサー：細谷 桂(スポーツアロマ・コンディショニングセンター)
オフィシャルメディアスタッフ：小森 信道(HATRICK COMPANY)

4



2017シーズン チーム成績（7月現在）

◆Jプロツアー：2勝

- ・石川ロードレース(雨澤 毅明)
- ・大田原クリテリウム(小野寺 玲)

※Jプロツアーチーム年間総合第2位



◆UCIレース(国内):

- ツール・ド・とちぎ 個人総合第3位(鈴木 讓)
- ツール・ド・とちぎ 新人賞(岡 篤志)
- ツール・ド・熊野 ポイント賞(阿部高之)



5

2017シーズン チームトピックス

U23日本代表チームへ3選手が招集。
欧州各地で開催されるネイションズカップ(国別対抗戦)を転戦しています。



雨澤 毅明
(栃木県下野市出身)



小野寺 玲
(栃木県鹿沼市出身)



岡 篤志

「U23のツール・ド・フランス」と呼ばれる若手選手の登竜門、
「ツール・ド・ラヴニール」へ3選手が参戦。(8/18～27)

6



サイクルスポーツ振興～若手選手の育成

ロードレーサーを子供達の“あこがれ”の対象に。
育成プログラムを拡充し、エリート選手へのステップアップを支援。
将来的なチーム基盤の強化、そして宇都宮から世界に羽ばたく選手を育成。
サイクルスポーツを通じての人間力育成にも注力。



7

下部育成チーム「ブラウ・ブリッツェン」

ブラウ・ブリッツェンは、宇都宮ブリッツェンや世界の舞台で活躍出来る若手選手を育成・輩出する為、2010年に設立された宇都宮ブリッツェンの下部育成チームです。栃木県内を中心に、限られた環境でも高いモチベーションを維持し、限界にチャレンジしたい社会人レーサーの受け皿としても活動しています。JBCFシリーズ『Jエリートツアー』を主戦場とし、Jエリートツアー団体総合優勝とジャパンカップオープンレースの優勝を目標に掲げています。トップチームである宇都宮ブリッツェンでは、チーム強化において直接的なスカウティングと下部育成チームからのランクアップ制度を設けています。また、毎年11月に宇都宮森林公園にてトライアウトを開催し、新たなレーサーの発掘を行っています。

- ・ゼネラルマネージャー: 荒井 学
- ・監督: 廣瀬 佳正
- ・コーチ: 鈴木 真理
- ・選手在籍: 35名
- ・オフィシャルウェブサイト: <http://www.blitzen.co.jp/blau/>



8



ジュニア育成プログラム「アップ・ビーリング・システム」

Up Bling System

UP = Utsunomiya Pride(宇都宮のプライドと向上心)
Upbringing = 育成 B-ling = BLITZEN + RING(輪)を繋げた造語

「アップ・ビーリング・システム」は子どもたちにサイクリススポーツの魅力と楽しさを伝えるジュニア育成プログラムです。
将来の夢にプロ自転車選手を描く子どもたちのためのジュニアクラブとして活動します。

チームでの練習を通して、交通ルールや安全走行のマナーだけでなく、集団での行動やフェアプレイ精神を学ぶことで、スポーツのみならず日常生活においても優れた人間性の育成も目指していきます。



ジュニア育成チーム「ブリッツェン・ステラ」

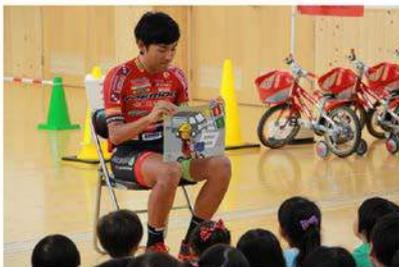


アップ・ビーリング・システムの活動として、次世代の選手育成を目的とした、小学4年生から6年生を対象のジュニアクラブ「ブリッツェンステラ」が2017年5月より活動を開始。
毎週水曜日、日曜日にトレーニング活動を実施中。



地域貢献活動—自転車安全教室の実施

栃木県庁や宇都宮市役所などの行政や警察とも連携し、小中学校および高校を中心に「自転車安全教室」を実施。子どもたちからしっかりと自転車のルールやマナーを守り、正しい自転車の乗り方を身に付けられるように、また将来的にその認識と意識の輪を広げて事故が減り、誰もが安心して自転車を楽しめるよう今後も継続的に実施して参ります。



10



地域貢献活動—自転車安全教室の実施

「週刊少年チャンピオン」で連載中、コミックス累計発行部数1400万部超の
人気作品「弱虫ペダル」とコラボ自転車安全教室を実施



コラボ反射ステッカー



自転車安全免許証



HINO 弱虫ペダルトラック

累計受講者数、43,000人を突破
(2017年8月現在)

11



2017 サイクリングイベント運営/企画協力

宇都宮ブリッツェン所属選手も参加者し参加者をサポート。
ライドイベントへの興味関心が強まるなか、参加者も年々増加。
地域における交流人口の増加とともに地域振興にも寄与する活動を行っております。

<2017弊社主催/運営協力イベント>

4月30日(土) うつのみやサイクルピクニック	(参加者 1,500名)
7月9日(日) 那須高原ロングライド with 那須ブラーゼン&宇都宮ブリッツェン	(参加者 2,700名)
7月17日(月・祝) 走ってみっぺ南会津 with 宇都宮ブリッツェン	(参加者 600名)
8月20日(日) やいた八方ヶ原ヒルクライム	(参加者 700名)
9月10日(日) ツールド・NIKKO with 宇都宮ブリッツェン	(参加者 2,000名)



12



2017 レース大会 企画運営

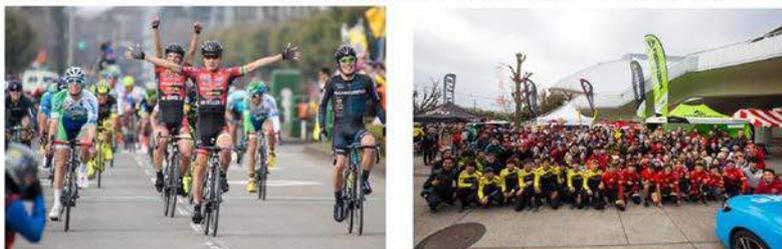
ジャパンカップ サイクルロードレース

日本はもとよりアジア最大のワンデーレース。毎年10月に宇都宮市で開催。
「UCIアジアツアー」にカテゴライズされ、グレードは最上位の「HC」(Hour Class)に分類。
当社は実行委員会の構成メンバーとして企画運営に参画。



JBCF宇都宮クリテリウム／宇都宮ロードレース

宇都宮ブリッツェンが主戦場とする国内シリーズ戦「Jプロツアー」の開幕戦。毎年3月に宇都宮市で開催。
当社とJプロツアーを主幹する一般社団法人全日本実業団自転車競技連盟との共催。



13

2017 レース大会 企画運営

JBCF那須塩原クリテリウム／那須ロードレース

宇都宮ブリッツェンが主戦場とする国内シリーズ戦「Jプロツアー」の公式戦。
当社はレース運営に協力。



JBCF大田原クリテリウム／やいた片岡ロードレース

宇都宮ブリッツェンが主戦場とする国内シリーズ戦「Jプロツアー」の公式戦。
当社はレース運営に協力。



宇都宮シクロクロス

11月～2月の間で2～3戦を予定するシクロクロスのシリーズ戦へ
実行委員会の構成メンバーとして参画。



14

施設運営事業

宇都宮市より指定管理者として施設運営管理業務を受託。
「自転車のまち、うつのみや」の実現に向けて、様々なサービスを提供しております。

◆宮サイクルステーション

JR宇都宮駅西口に隣接する施設。
無料で利用できる、トイレや休憩スペース、自転車修理工具などを用意。またレンタルサイクルやシャワー室などの有料サービスも併設しています。



◆宇都宮市サイクリングターミナル



宇都宮市森林公園に隣接する施設。
レンタルサイクルをはじめ、食事・宿泊・研修・宴会などにも対応。
自然と親しむ人と自転車の中継ステーションとして、運営しております。

15



メディアへの露出

《テレビ/ラジオ》

- ・NHK総合 ひるまえホット 自転車旅番組出演中
- ・NHK宇都宮放送局 自転車旅番組 キラリ☆とち旅レギュラー出演中
- ・とちぎテレビ Ride ON!毎週木曜22時～22時30分 視聴数約4万人
- ・RADIO BERRY76.4FM LOVE CYCLISTA 毎週水曜20時～20時30分 視聴数2万8千人
- ・CRT栃木放送「イナズマRadio!」毎週月曜 21:45～

《新聞/雑誌》

- ・下野新聞 年間掲載 40回以上 発行部数30万部
- ・読売新聞 年間掲載 24回以上 発行部数19万部
- ・毎日新聞 年間掲載 30回以上 発行部数 4万部
- ・もんみや 年間掲載 12回以上 発行部数 5万部
- ・坂田新聞店 Tonton 年間掲載12回以上 発行部数 6万部

※上記はメディア露出実績の一部です。



16



「サイクルスポーツ・ツーリズムセミナー」参加者アンケート

本日はご参加いただきありがとうございました。
今後の本事業の参考にさせていただきますので、お手数ですがアンケートにご協力ください。

■あなたのことについて教えてください

- 性別： 男性 女性
年齢： 10代 20代 30代 40代 50代 60代以上
職業： 会社員 会社経営者 個人事業主 公務員 大学教職員
大学生 短大/専門学校
その他（ ）

■本日のセミナーは何でお知りになりましたか？（複数回答可）

- 大学ホームページ COC+ホームページ Facebook
DM（チラシ） COC+事業協働機関からの紹介
その他（ ）

■セミナー全体の満足度をお聞かせください。

（不満足） （満足）
（○を記入→）

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

感想：

■その他ご意見がありましたらご自由にお書きください。

※アンケート調査の結果は、本事業の目的以外で使用することはございません。

平成 27 年度採択 文部科学省 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）
オール青森で取り組む「地域創生人財」育成・定着事業

発行日 平成 30 年 1 月

発 行 青森 COC+ 推進機構 雇用創出連携プロジェクト
「ツーリズム」

事務局 青森中央学院大学 COC+ 事業推進事務局

〒030-0132 青森市大字横内字神田 1 2

TEL : 017-728-8161 (直通) FAX : 017-738-8333

E-mail: acgu-coc@aomoricgu.ac.jp

文部科学省

 **地(知)の拠点**  **青森中央学院大学**

青森中央学院大学は、「オール青森で取り組む『地域創生人財』育成・定着事業」の参加校です。